

# 医介「クラスター」構想

## 看多機強化、介護助手導入も



あいふれたまグループ代表 鈴木忠

「ターミナル期の対応状況について  
鈴木 訪問診療での看取り対応件数は年間19割を超える。」

川崎市多摩区で、半径6キロメートルの同心円状に「ヘルスケアクラスター」を形成するたふれあいグループ。介護・医療施設を統合的に展開することで、収益基盤を確立すると同時に、ターミナル期まで対応できる体制を構築している。グループ代表の鈴木忠医師に、「クラスター構想での医療ケア体制強化」の切り口から話を聞いた。

50件ほどで、常時15人から20人はターミナル期の利用者がいる状況。看護小規模多機能型居宅介護の平均利用日数は約60日となっている。また、グループホームでの看取り率は9割を超える。

現在、ホスピス型住宅の開設も視野に入れている。多様なサービスを展開するグループ内で、適切なサービスに利用者を繋げるというのが「クラスター構想」の基本的な姿勢。今後も利用者に提供できる選択肢を広げる。



多職種が意見を交わし現場を運営

「看多機の位置づけの見直しを図った鈴木 看多機の位置づけを明確化し、全職員に浸透させる取り組みを行っている。約5年運営してきた中で、その位置づけが曖昧とな

多機能型居宅介護のよくなる稼働状況で、意欲が高い訪問部門を中心に現場の士気を上げてしまっていた。そこで昨年末、▽ターミナルケアを担う機能▽体調不良の人をサポートで受け入れ回復後に自宅に戻す循環機能▽受け入れた利用者を自宅や施設など適切な環境へ振り分ける機能——と3機能を全職員に周知した。これが奏功し、徐々に現場の意識も高まり、要介護度の高い

人の割合が増えてきている。看多機の利用日数を短縮しても、グループ内のサービスで支援を継続できるのは経営上の強み。看多機のケアマネジャーとグループ内の居宅ケアマネジャーの交流も進め、連携もスムーズに行えている。

「グループ横断的なマネジメントも重要鈴木 看多機の平均要介護度が低くなるようになったことは、各事業所が現場の判断で受け入れの可否を決めてしまいうことから起こる。各事業所が「個の最適化」を図ろうとする傾向は少なからず生じたため、本部主導の下、事業方針の浸透を図り、マネジメントしていくことは非常に有用。また、利用者の受け入れ判断を本部が行えるよう、窓口を一元化し、ソーシャルワーカー6名が利用者を適切にサービスに繋げている。これらの甲斐もあり、クラスター構想によるシナジーも大きくなってきた。

「医療ケアを担う人材の育成について鈴木 平均要介護度を高く維持し、かつ高稼働させるとなると、現場スタッフに求められるスキルは高い。現在、介護スタッフが略

痰吸引や経管栄養に対応できるよう喀痰吸引等研修の受講を進めている。9名の介護スタッフのうち、2名が資格取得済み、5名が受講中だ。

「タスクシフトも進むのでは鈴木 看護職から介護職へのタスクシフトには、資格取得のほか、経験値を積んでもらうことが重要。当グループでは医療依存度の高い人も積極的に受け入れてきたため、介護スタッフの看取りの経験値は非常に高い。現在は、さらに介護職が「ケア」に集中するた

「地域住民との接点づくりについて鈴木 エンドユーザーは地域の人。住民向けセミナーや健康診断などで繋がりを作り、地域での存在感を高めている。」

**■事業概要**  
 クリニック(1)、訪問リハビリテーション(1)、訪問看護ステーション(1)、グループホーム(1)、看護小規模多機能とGHの複合施設(1)、デイサービス(1)を運営。ほか、障害領域では就労支援サービス、保健分野では住民の健康チェックやセミナーを定期的に行っている。スタッフは現在約170名、直近年間売上高は約11億円。